

【卒業論文と父の姿】

卒業論文のテーマが学問的にすぐれていても作業が全然進まない場合、その学生の人生が見えないだけでなく、親の姿も見えていないことがある。

幼いころ、親よりなにかしらの問題意識をもらい、思

春期青年期に、社会と親の姿の食い違いから〈社会的な問題意識〉を持たされる。大学の卒業論文のテーマは、学んでいる学問に照らして、それまで持ってしまった問題意識を〈自分のもの〉として、すなわち〈客観的なもの〉にとらえ直すものであるかもしれない。これは親からの精神的な自立の抛り所となる。

『明るい炭鉱』を書いた吉岡宏高さんは、父親が炭鉱の「労務屋」であった。父から聞いた話を炭鉱に〈検証〉に行く（二二一ページ）。

小四になると、自転車でも市内を〈研究〉する生活になり、作文にして発表する。中一で万字地区や夕張にフールドワークに出かけてノートに報告書を書く。「調べる綴方」である！このときいっしょに行った友だちが、〈同人〉、すなわち志を同じにして大胆な行動を

生活教育 キーワード

する仲間であろうか。大学に入学直後、生協の棚にあった布施鉄治編著『地域産業変動と階級・階層』に出会って購入する。この本のとらえ方と〈父の姿〉に「根本的な所でズレを感じ」る（二三七ページ）。そして地理学と経営学のクロスするところで、三万字を

超える卒業論文「戦後北海道の石炭産業——石炭斜陽化以降の北海道炭礦汽船の経営を事例として」を三か月ほとんど寝ないで書き上げた。北海道の全部の炭鉱を訪れて話を聞いたとのことである（二三九ページ）。これが現在の地域マネジメントにつながっている。

『明るい炭鉱』を、自分が自分にした形成的な〈生活教育の実践記録〉として読みたい。どうしてこういう成長できたのか、その条件を見つけ、それを各自の生活教育実践に足し

てほしい。

（研究部・加藤聡一）

〈参考文献〉

- ① 吉岡宏高 『明るい炭鉱』 創元社、二〇一二年。十一月号でも紹介。
- ② 勝尾金弥 『この父にして 藤岡作太郎 鈴木大拙 木村榮の幼児』 梧桐書院、二〇〇四年。
- ③ 伊藤比呂美 『父の生きる』 光文社、二〇一四年。一七七ページ。